

3. 診 療 部

目 次

糖尿病内科	27
脳神経内科	29
呼吸器内科	31
リウマチ膠原病内科	32
消化器内科	33
循環器内科	35
外科	36
脳神経外科	38
整形外科	39
眼科	40
泌尿器科	41
麻酔科	42

糖 尿 病 内 科

(1) スタッフ

医員（講師）	大西 峰樹
医員（助教）	岡谷 明尚
医員（非常勤）	宮脇 正博、重本 翔、三好 綾香

（令和3年3月31日現在）

(2) 特徴

糖尿病内科は、常勤医2名および非常勤医3名による週4回の専門外来で、糖尿病を中心に、脂質異常症、高尿酸血症などの代謝性疾患の診断・治療を行っている。また常勤医による、血糖コントロール入院を精力的に行っている。

当科ではチーム医療を重視しており、現在、当院糖尿病専門チームには日本糖尿病療養指導士が3名在籍し、栄養指導、フットケアなど、チームとして糖尿病患者さんへのケアに取り組んでいる。

例年は月に1回、主に外来通院の患者様を対象に、糖尿病の病態、食事・運動・薬物治療その他に関する知識の教育を目的とした糖尿病教室を行っているが、コロナ禍であったため、今年度は中止せざるを得ない状況であった。状況を見つつ糖尿病教室を再開し、糖尿病に関する知識を広めることで、慢性的に続く高血糖や代謝異常による網膜症、腎症、神経障害、細小血管障害、皮膚感染などの合併症を予防し、患者さんの生活の質（QOL）を保つことに貢献していきたいと考えている。

(3) 診療実績

<外来診療実績>

	2018年度	2019年度	2020年度
フットケア外来受診数	59件	70件	62件

<入院診療実績>

	2018年度	2019年度	2020年度
血糖コントロール入院	22件	39件	24件

<外来糖尿病教室実績>

	2018年度	2019年度	2020年度
年間受講者数	37名	11名	コロナ禍により 中止

(4) 今後の目標

今年度は糖尿病教育入院の円滑化にむけてクリニカルパスの運用を行い、改善点が発生次第、更新を行ってきた。また、コロナ禍であったため、糖尿病教室を開催できなかったが、来年度はワクチンの接種や緊急事態宣言の解除等を視野に入れ、再開できれば再開する予定である。

脳 神 経 内 科

(1) スタッフ

病院長 木村 文治
特務講師 宇野田 喜一
医員（非常勤） 太田 真

（令和3年3月31日現在）

2019年4月1日 神経学会教育関連施設 取得

(2) 特徴

大阪医科大学三島南病院では、2019年4月より「脳神経内科」が専門診療科の一つに加わりました。高槻地域では大阪医科大学本院と高槻病院と当院のみが常勤医がいる「脳神経内科」専門施設として近畿厚生局から認可を受けています。

対象疾患としては、脳血管障害（脳梗塞、脳出血など）、脳髄膜炎、アルツハイマー病などの認知症、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症などの神経難病、神経免疫疾患（重症筋無力症、多発性筋炎、ギラン・バレー症候群など）、片頭痛などです。当科の基本的方針や特色としては神経難病から頭痛まで、幅広く神経内科疾患に対応しております。また、脳神経外科、整形外科およびリハビリテーション科などとも密に連携をとりながら診療を行っております。

(3) 診療実績

ICD 病名別内訳

ICD 病名	2018年	2019年	2020年
パーキンソン病関連疾患	63件	77件	73件
脳血管疾患の続発・後遺症	48件	48件	140件
神経系の変性疾患, 詳細不明	17件	37件	30件
脊髄性筋萎縮症および ALS	16件	30件	36件
てんかん	6件	6件	6件
炎症性多発（性）ニューロパチ<シ>ー	6件	6件	6件
他に分類されるその他の疾患の認知症	5件	5件	5件
その他のミオパチ<シ>ー	4件	2件	6件
重症筋無力症	4件	4件	0件
アルツハイマー病の認知症	3件	5件	2件
一過性脳虚血発作および関連症候群	3件	5件	2件
多系統変性（症）脊髄小脳変性症	2件	11件	7件

ICD 病名	2018年	2019年	2020年
髄膜炎	1件	1件	2件
多発（性）ニューロパチ<シ>- CIDP	1件	1件	2件
その他の脳炎，脊髄炎および脳脊髄炎	1件	1件	2件
その他の舞踏病	1件	1件	0件
もやもや病<ウイリス動脈輪閉塞症>	1件	0件	0件
原発性筋障害	1件	1件	0件
限局性脳萎縮（症）	1件	1件	0件
高血圧性脳症	1件	1件	0件
細菌性髄膜炎，他に分類されないもの	1件	1件	3件
多発性硬化症	1件	1件	1件
中枢神経系のその他の脱髄疾患	1件	1件	1件
脳実質外動脈の閉塞および狭窄	1件	1件	1件
片頭痛	1件	1件	0件
脳腫瘍	0件	0件	9件
総計	194件	248件	334件

（４）今後の目標

「新しい時代へ 共に育み チームワークで取り組む 地域医療」をスローガンに、脳神経内科領域における急性期から回復期・慢性期まで、難病医療に特徴を有する施設として輪・話・和を持って安心で安全な医療を幅広く提供したいと考えています。

呼 吸 器 内 科

(1) スタッフ

医員 村尾 仁

(令和3年3月31日現在)

(2) 特徴

疾患は広範囲にまたがるが、最も多いものは気管支喘息、COPDである。

また、CPAPを導入された睡眠時無呼吸症候群、慢性進行性の難病である間質性肺炎、肺非結核性抗酸菌症、通常の急性肺炎を含む呼吸器感染症となっている。

肺がんなどの悪性腫瘍の診療については、飛び込みの初診もあるが、大半はクリニックで施行された肺がん検診後の紹介患者さんが多数となっている。

不安を早期に緩和するため可能な限り当日に胸部CTを施行し、結果を説明している。

さらに精査が必要となれば、大阪医科大学附属病院 呼吸器腫瘍内科もしくは呼吸器外科に紹介し、遅滞ない診断と治療の流れを実現している。その後、根治や延命を目的とする積極的な治療を終了された段階になれば、再び当院でフォローしている。

(3) 診療実績

患者の内訳

気管支喘息・COPD	: 60%
肺がん	: 15%
睡眠時無呼吸症候群	: 5%
間質性肺炎	: 5%
肺非結核性抗酸菌症	: 5%
急性肺炎等	: 10%

リウマチ膠原病内科

(1) スタッフ

副院長 榎野 茂樹
医員（非常勤） 松田 翔悟

（令和3年3月31日現在）

(2) 特徴

平成30年4月にリウマチ膠原病内科を担当するの常勤医師1名が赴任して、より専門的な診療を開始した。現在は非常勤の外来担当医師を加えた2名体制で診療を行っている。

(3) 診療実績

外来

管理外来患者数（膠原病関係のみ）60名

病名	2018年度	2019年度	2019年度
関節リウマチ	24人	27人	45人
リウマチ性多発筋痛症	9人	9人	10人
強皮症群	3人	7人	7人
尿酸	7人	5人	25人
血管炎	3人	4人	3人
痛風	2人	1人	1人
スティーブンス・ジョンソン症候群	2人	2人	2人
脊椎関節炎	1人	1人	2人
筋炎			1人
ベーチェット病			1人
その他	9人	15人	9人

診察体制

	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜
午前		榎野				
午後		松田		榎野		

消化器内科

(1) スタッフ

副院長、内科統括部長（特務教授） 瀧井 道明

消化器内科部長（臨床教育教授） 中畑 孔克

病院長補佐（非常勤）（大阪医科大学内科学Ⅱ教室教授） 樋口 和秀

医員（非常勤） 大坂 直文、三田真理子、原 あずさ、菊谷 聡、箱田 明俊、石原 由希

（令和3年3月31日現在）

(2) 特徴

- ・ 消化器疾患は対象臓器が広く、腹部症状も多様で画像診断の占める割合が高いため、専門医による迅速な画像検査体制を整備している。平成30年度から始まった高槻市胃がん内視鏡検診の対象者を広く受け付けている。大腸がん検診（便潜血反応）で要精密検査判定の方は、紹介を頂ければ早急に大腸内視鏡検査を予約、施行している。
- ・ 通常の上部および下部消化管内視鏡検査で原因不明の消化管出血（OGIB；occult gastrointestinal bleeding）症例では、専門的なカプセル内視鏡による小腸疾患の内視鏡診断を行っている。
- ・ 当科は大阪医科大学附属病院消化器内科（以下、本院消化器内科）との連携体制が整備されており、当院で診断・治療が困難と考えられる場合には、迅速に本院消化器内科に紹介し対応している。例えば、総胆管結石による急性胆管炎に対しては、早急に本院消化器内科に紹介して、胆汁ドレナージなどの処置を施行してもらっている。
- ・ 入院患者では、言語聴覚士（ST）による嚥下機能評価、栄養サポートチーム（NST）による栄養状態評価を積極的に行った上で、病態に応じた適切な栄養療法の導入に努めている。高度の嚥下摂食障害があり経鼻胃管栄養が長期間に及ぶ患者には、経皮内視鏡的胃瘻造設術（PEG）を施行している。高齢者で診断困難な急性腹症の症例に対しても、当院外科に迅速に相談可能な体制を整えている。また、肝硬変などの難治性腹水に対しては、適応があれば腹水濾過濃縮再静注法（CART）を行っている。
- ・ 外来診療は非常勤の樋口教授の特殊外来をはじめとして、専門分野に応じて計7名の医師により行っている。薬物治療として、ヘリコバクター・ピロリ菌感染性胃炎に対する除菌療法、C型慢性肝炎に対するインターフェロンフリーの経口抗ウイルス剤治療、B型慢性肝炎に対する経口核酸アナログ製剤治療なども行っている。
- ・ 消化器疾患が疑われる高齢の患者で、外来通院での検査が困難な場合には、短期間の検査入院も行っている。

(3) 診療実績

<主な検査・処置件数>

	2018年度	2019年度	2020年度
1) 上部消化管内視鏡検査総数	818件	907件	815件
・高槻市胃がん内視鏡検診	47件	100件	42件
・経皮内視鏡的胃瘻造設術 (PEG)	34件	36件	28件
・内視鏡的止血術	10件	17件	9件
2) 大腸内視鏡検査総数	440件	543件	464件
・ポリペクトミー	83件	107件	218件
・EMR	77件	116件	127件
・内視鏡的止血術	4件	3件	14件
3) 消化管造影検査総数	61件	34件	35件
・上部消化管造影検査	47件	20件	13件
・注腸造影検査	3件	3件	11件
・イレウス管挿入・造影	11件	11件	11件
4) 小腸カプセル内視鏡検査	0件	0件	5件
5) 腹部超音波検査	519件	570件	446件

(4) 今後の目標

- ・火曜日午後に慢性便秘症外来が開設されており、その他各外来ともに少しでも腹部症状・不定愁訴のある患者、消化器疾患を心配されている患者を広く受け入れていく。
- ・検査・処置の件数の増加のみならず、大学付設の病院として診療の質的な向上を目標とする。当院外科や本院消化器内科との連携をさらに強化して、常にベストな治療方針を選択できるように努めていく。すなわち、地域医療に根ざしながら地域医療の高質化を目標としていく。
- ・高齢の入院患者では、消化器疾患のみならず慢性疾患が複合的に併存していることが多く、長期の臥床によりADLが低下しやすい状況にある。そこで、早期にリハビリテーションを開始し、栄養療法を積極的に導入するなど、消化器疾患を中心とした全人的な総合内科診療を目標としていく。

循 環 器 内 科

(1) スタッフ

副院長・循環器内科部長（特務教授） 鈴木 秀治
医員（特務助教） 野木 信平

（令和3年3月31日現在）

(2) 特徴

循環器疾患全般に対応する。外来および入院診療をはじめとし、他科とも連携を図り診療に当たっている。大阪医科大学循環器内科から常勤医が派遣されており、他に同非常勤医師5名が外来診療、ペースメーカー外来、心エコー検査、エルゴメーター負荷心電図、CT検査、また当直業務の一部に携わっている。

(3) 診療実績

- ・外来診療では、内科外来、循環器内科紹介診、ペースメーカー外来、術前外来を行っている。
- ・入院診療では、心不全、不整脈、虚血性心疾患等を対象としている。
- ・外来検査では、心電図、ABI、心エコー、ホルター心電図、モバイル型長時間心電計、冠動脈CT、エルゴメーター負荷心電図が施行可能である。（心エコー：632件、ホルター心電図：114件）
- ・入院検査では、心臓カテーテル検査を行っている。
- ・治療として、経皮的冠動脈形成術（PCI）、一時的ペースメーカー留置術を行っている。

(4) 今後の目標

令和3年度より新体制となる予定である。循環器疾患への対応を拡充し、さらなる実績を重ねていきたい。

外 科

(1) スタッフ

部長	井上 善博 (特務准教授)
医師	鈴木 悠介 (レジデント)
名誉病院長	後藤 研三

(令和3年3月31日現在)

(2) 特徴

一般・消化器外科、乳腺外科を担当する常勤医師3名及び非常勤医師3名の合計6名で診療を行っている。専門外来としては、肝臓（井上善博医師）、大腸（山本誠士医師）、乳腺（岩本充彦医師）、ヘルニア（鈴木悠介医師）外来を行っている。

外科では、肝臓領域を中心とした一般・消化器外科（肝臓、大腸癌、胃癌、胆石、ヘルニア、痔核、虫垂炎、ポート造設など）の手術を行っている。また、化学療法、終末期医療も行い、大阪医科大学形成外科医師による褥瘡回診、WOC Nrs、当院外科医師による褥瘡予防回診にて褥瘡の新規発生予防および治療に取り組んでいる。ほか、大学本院もしくは他院にて手術を受けた患者様の術後リハビリおよび在宅復帰までの支援や療養環境の提供も行っている。

(3) 診療実績

<手術実績>

	2018年度	2019年度	2020年度
食道手術	0件	0件	1件
胃悪性腫瘍手術	3件	1件	10件
大腸悪性腫瘍手術	12件	16件	24件
大腸良性疾患手術（捻転、人工肛門造設、閉鎖）	8件	13件	20件
肝切除術	0件	9件	56件
胆嚢炎、胆嚢内結石、総胆管結石症手術	12件	18件	40件
膵臓手術	0件	0件	1件
ヘルニア手術（鼠経・臍・腹壁）	31件	35件	28件
肛門手術	11件	26件	12件
血管手術	1件	2件	2件
中心静脈ポート手術	11件	13件	51件
腹腔・静脈シャント手術	0件	0件	11件
虫垂炎手術	0件	2件	5件
その他（体表手術など）	60件	28件	24件
計	149件	163件	285件

手術は基本的に腹腔鏡下手術にて施行している。

(4) 今後の目標

当院各科および大学本院との連携をより緊密に行い、良性・慢性期疾患をはじめとする安全な手術治療およびリハビリテーションの提供を行っていく予定である。

脳 神 経 外 科

(1) スタッフ

部長 西原賢太郎
医員（非常勤） 梶本 宜永

（令和3年3月31日現在）

(2) 特徴

脳神経外科専門医1名が勤務している。急性期、療養、地域包括ケア、回復期リハビリの各病棟があり、患者さんの病態に応じた入院加療を行っている。大阪医科大学附属病院、近隣病院、地域開業医、施設など幅広く紹介をいただいている。外来診察に於いては、緊急性が高いと考えられる場合には速やかにCT、MRIを実施している。重症脳卒中については、大阪医科大学附属病院脳神経外科の応援体制の下、緊急開頭手術や血管内治療を実施している。

(3) 診療実績

・手術件数

手術	2018年度	2019年度	2020年度
経皮的椎体形成術	0	0	11
頭蓋内血腫除去術	0	0	6
穿頭術	5	8	5
脊椎固定術	0	0	2
腫瘍摘出術	0	2	1
クリッピング術	1	1	1
脳血管内手術	0	2	0
その他	5	5	12

(4) 今後の目標

脳卒中を発症しても、早期に脳神経外科医による診察を受けることができれば、それだけ回復率は高くなる。北摂地区には脳神経外科を標榜する病院が本当に少なく、当院としても大阪医科大学附属病院との連携を強化しながら、北摂地区の脳神経外科医療グループの一員として少しでも地域に貢献できればと考えている。当院では脳神経内科医師の増員もあって、脳梗塞超急性期に於いての血栓溶解療法（t-PA投与）の機会が増加しており、今後も更に質の高い医療の提供を目指したい。

整 形 外 科

(1) スタッフ

副院長（特務教授） 金 明博
医員 木澤 桃子
非常勤医師 3名

（令和3年3月31日現在）

(2) 特徴

外傷、慢性疾患に関わらず、整形外科全般に渡る診療を行っている。中でも脊椎や関節の慢性疾患、四肢の骨折、外傷を専門分野としており、脊椎固定術や人工関節置換置換術、観血的骨接合術などの手術療法を積極的に実施している。

(3) 診療実績

手術件数 145件

主な術式	2018年度	2019年度	2020年度
観血的骨接合術	53件	56件	68件
脊椎手術	29件	20件	32件
人工関節手術	14件	23件	26件
その他	58件	57件	19件

(4) 今後の目標

整形外科疾患・外傷全般にわたり診断の精度と臨床成績の改善を図り、診療実績の一層の向上を目指します。

眼 科

(1) スタッフ

医員	小 寫 祥太
医員	吉 岡 千紗
医員 (非常勤)	舟 橋 順子
医員 (非常勤)	佐 藤 孝樹
医員 (非常勤)	三 村 真士
医員 (非常勤)	吉 川 大和

(令和3年3月31日現在)

(2) 特徴

当院眼科では、月曜日から金曜日の午前中に眼科全般の外来診療にあたっており、毎週木曜日午前には佐藤孝樹医師の網膜疾患専門外来を設け、硝子体手術適応の方は当院で手術を行っている。また毎週月曜日午前には吉川大和医師による角膜・眼表面専門外来を、午後には小寫祥太医師による緑内障専門外来を設けている。さらに月1回木曜日に三村真士医師による眼形成・涙道疾患の専門外来と手術を施行している。

(3) 診療実績

水曜日と木曜日を手術日とし、2020年度は白内障手術269件、硝子体手術17件、眼形成57件を施行している。白内障手術は日帰り・1泊2日・2泊3日で対応しており、入院中及び退院後の生活まで時間をかけて丁寧に説明し、患者様また家族様の不安を少しでも軽減できるよう心がけている。

外来では網膜疾患に対して蛍光眼底造影検査・レーザー光凝固術・硝子体注射を施行しているが、昨年度より逆睫毛に対して電気分解術・涙道閉塞に対して涙道チューブ挿入を開始し治療内容が広がっている。

	2018年度	2019年度	2020年度
白内障手術	155件	304件	269件
硝子体手術	7件	13件	17件
眼形成	0件	19件	57件

(4) 今後の目標

白内障手術だけでなく硝子体手術を引き続き行い、さらに当院で可能な治療内容を充実させ、少しでも多くの患者様のQOV (Quality Of Vision) 向上のため努力していきたいと考えている。

泌 尿 器 科

(1) スタッフ

泌尿器科部長 小林 大介
医 員 木下 将宏、西村 一希
非常勤 4名

(令和3年3月31日現在)

(2) 特徴

- ・泌尿器科は、小児から成人、高齢者にいたるまでの泌尿器疾患（夜尿症、停留精巣など）、尿路、性器の各種がん（膀胱がん、前立腺がん、腎がん、精巣がんなど）、尿路結石症、前立腺肥大症、尿失禁、尿路感染症（腎盂腎炎、膀胱炎など）、性感染症（尿道炎）などの泌尿器科疾患の全般について診療・治療を行っている。過活動膀胱、神経因性膀胱、尿路結石、悪性腫瘍などの治療を行っている。
- ・PSA 検診異常（4.0ng/ml 以上）、積極的に前立腺生検、膀胱鏡検査、画像検査など行い精査加療を行っている。

(3) 診療実績

手術名称	2018年度	2019年度	2020年度
経尿道的尿管ステント留置術	20件	44件	32件
経尿道的前立腺切除術（TUR-P）	15件	0件	8件
経尿道的膀胱腫瘍切除術（TUR-BT）	13件	19件	10件
内シャント設置術	4件	6件	9件
経尿道的尿管ステント抜去術	2件	3件	1件
経皮的腎（腎盂）瘻造設術	2件	2件	0件
血管移植術	1件	3件	3件
腎（尿管）悪性腫瘍手術	1件	2件	2件
その他	4件	17件	8件
合計	62件	96件	73件

前立腺生検	14件	13件	1件
-------	-----	-----	----

(4) 今後の目標

- ・泌尿器科疾患を抱える患者の治療を積極的に受け、地域医療に根ざした病院を目指す。

麻 酔 科

(1) スタッフ

麻醉科部長（特務准教授） 辰巳 真一

（令和3年3月31日現在）

(2) 特徴

麻醉科は、常勤医師1名、水曜日の麻醉を担当する非常勤医師1名の2名体制で、平成28年4月に診療科として設置された。

主に手術麻醉を担当し、現在のところ外来診療は行っていない。

(3) 診療実績

	2019年度実績（件）	2020年度実績（件）	2020年度月平均（件）
全身麻醉（吸入）	257	370	30.8
全身麻醉（TIVA）	4	20	1.7
鎮静	11	52	4.3
脊髄くも膜下麻醉	18	10	0.8
合計	290	452	22.4

(4) 今後の目標

手術件数の増加、および大侵襲手術の増加に対応して、安全な周術期管理、患者満足度の高い麻醉のための環境を整えていく。

4. 看護部

目次

看護部	43
南2階病棟（一般急性期外科病棟）	50
北2階病棟（一般急性期内科病棟）	52
南3階西病棟（地域包括ケア病棟）	54
南3階東病棟（医療療養病棟）	56
北3階病棟（回復期リハビリ病棟）	58
外来	60
手術室・中央材料室	62
血液浄化センター	63

看 護 部

(1) スタッフ

- ・看護部長 松本 加奈
- ・看護副部長 福富 美樹
- ・看護副部長 愛場 佐緒理
- ・看護監 東 典子

(令和3年3月31日現在)

(2) 特徴

[看護部理念]

私たちは、一人ひとりの患者さまの権利を尊重し、専門的知識と技術・思いやりのある看護を提供します。

[看護部基本方針]

1. 看護専門職として生命・人格・尊厳を守る判断能力を高め、自己決定を尊重し思いやりのある配慮をもって対応する
2. 継続看護の充実を図り社会の変化や人々のニーズの変化に対応できる人材を育成する
3. ケアミックス型病院として他職種と協働しながら包括した医療・看護を提供し地域医療に貢献する
4. 看護部として経営基盤の安定化へ積極的に参画する

[看護部重点目標]

1. 人材育成

1) 離職防止と職員定着

①職場の安全性を確保しワークライフバランスを意識した勤務を作成する

キャリアバランスと一日の業務量を考慮したものとする

②時間外労働時間減少についての目標と対策を各部署の目標に盛り込む 目標目安15H/月以内

③年次有給休暇取得（非常勤、派遣含む） 5日必須/年、目標値10日/年

2018実績7.1日/年

取得率の偏りをなくす

④院内外研修への積極的参加

部署の看護の特徴など踏まえスタッフ個々の能力を考えた研修への参加、推薦

研修後のフィードバック

⑤職場環境の活性化

各委員会リンクナースとスタッフの情報共有や勉強会

相談、話し合える場の構築

⑥中間管理職者の育成（師長・主任）

自己のSWOT分析を行い強み、弱みを把握する

SWOT分析の課題を自己学習や自己研鑽に繋げる

⑦看護フェア、就職フェア・説明会への参加

三島南病院の特徴、看護部の教育内容など理解し外部に発信できる

2. 病院経営参画

1) 効果・効率的な病床管理

①自部署の入退院状況把握し、他部署とカンファレンスや連携を図り積極的な病床管理を行う

②経済性及び病状経過を考え、直接入院の受け入れを積極的に行う（全病棟）

2) 入退院調整、入院前支援体制の整備

①地域の医療、看護、介護、福祉関係者と情報共有の場を多く持ち退院支援を実施する

②退院前カンファレンスには、受け持ち看護師が参加し発言する

③入院前支援情報を有効に活用した看護計画を立案し退院支援に繋げる

3) 診療報酬の加算への取り組み

①認知症ケア加算、入院時加算

4) 看護部として病院の広報活動に積極的参加

①地域住民向けの講演会、救護活動

3. 教育

1) クリニカルラダーシステム全稼働

2) 部署教育

①責任者はクリニカルラダーの趣旨を理解しスタッフに指導する

②研修参加者は部署内へのフィードバックを行う

3) 看護学生実習受け入れ

①実習生に対して手本となる看護を実践する

②スタッフ全員で受け入れ、指導に参加する

4. 看護ケアの質向上

1) 受け持ち看護師の役割の理解と発揮

①受け持ち看護師を中心としたケースカンファレンスの実施

2) 看護業務の現状把握と見直し、改善

①マニュアルの遵守および見直し（各委員会で確認）

3) 職場風土の改善

①報告・連絡・相談体制、待遇、コミュニケーション

②安全確保、安心・安楽なケアの提供

③療養環境の整備

4) 人材活用

①リリーフ体制の強化

②看護補助員業務との連携、ベットのサイドケアの充実

5. 安全対策・感染対策

1) 安全、感染に関連する情報を上長へのタイムリーな報告

①院内周知事項の伝達と周知徹底（遵守）

2) 院内感染、事故発生時の早期対応

①感染対策室、安全対策室、医事課、総務課、関係部門との連携強化

(3) 活動内容と評価

[職員構成]

1. 看護職員

	総数	常勤	非常勤
看護師	121名	109名	12名
准看護師	15名	13名	2名
看護補助者	38名	21名	17名
看護事務（看護補助者）	6名	7名	0名
計	181名	150名	31名

2. 採用者

看護師（新人）	4名
看護師（中途）	10名
医大よりの移動者	7名
看護補助者	18名

3. 離職率

看護師（新人）	0%
看護師（准看護師を含む）	7.6%
看護補助員（助手、看護事務含む）	19.0%

[資格取得]

認定看護管理者

認定看護管理者研修ファーストレベル	0名
認定看護管理者研修セカンドレベル	0名

認定看護師教育課程

皮膚・排泄ケア分野	1名
-----------	----

[教育内容]

2020年度看護部教育実績

1) 院外研修

①大阪府看護協会短期研修

月	研修内容	参加人数
6月	COVID-19対応者育成看護管理	1名
7月	COVID-19感染対策の基礎	2名
10月	看護倫理・医療安全	4名
	ストレスマネジメント	4名
11月	看護補助者の活用	1名
12月	ヘルシーワークプレイスを目指し職場環境を考えよう	2名
	慢性心不全患者の療養支援	3名
	人工呼吸器装着患者の看護①	2名
	認知症高齢者の理解	2名
	看護管理者のリフレクション	2名
1月	看護補助者のための医療安全	2名
	今日から実践できるじょく創ケア③	1名
	大阪府保健師助産師看護師実習指導者講習フォローアップ研修①	2名
2月	大人の発達障害	3名
	新人研修責任者フォローアップ研修	2名
	組織の現状分析から変革につなげる看護管理	1名
	看護管理者に大切な人材育成とチームマネジメント	1名
	感染防止対策	4名
	医療介護政策の大転換と看護への期待	1名
	外来看護師が行う在宅療養支援と看護記録	1名
3月	キャリアマネジメント	4名
	退院支援強化研修	1名
	看護補助者との協働を推進するための研修会	2名
	地域で取り組む看取り	1名
	合計	49名

②日本看護協会神戸研修センター

月	研修内容	参加人数
12月	コロナ禍における新人看護職員研修	1名
	合計	1名

2) 院内研修

月	内容		
	ラダー I	全体	看護補助員
4月	看護技術研修		
5月	目標の看護師像		
6月	感染管理		
7月			
8月			
9月	与薬	認知症ケアについて①	
10月	休息・良肢位の保持	認知症ケアについて②	
11月	認知症ケアについて	認知症ケアについて③	
12月	看護記録		
	認知症看護		
1月			看護補助員研修①
	看護必要度	看護必要度	
2月			看護補助員研修②
3月	看護を語る		看護補助員研修③

[学会発表]

第94回大阪透析研究会 2021年3月7日(日) 血液浄化センター
「仕掛け学? ついついやっちゃう手指消毒
～種子消毒のナッジで血液浄化センタースタッフの意識改革～」

[実習受け入れ]

大阪医科大学看護学部 広域統合看護学実習 (老年看護学領域)
大阪医科大学看護学部 広域統合看護学実習 (基礎看護学領域) 5名
大阪医科大学看護学部 広域統合看護学実習 (老年看護学領域) 8名
大阪医科大学看護学部 領域別看護学実習 (慢性看護学Ⅱ) 96名
藍野大学医療保健学部看護学科 (老年看護学) 8名
淀川区医師会看護専門学校 (老年看護学) 5名
淀川区医師会看護専門学校 (基礎看護学) 22名

(4) 今年度の重点目標評価及び課題

1. 人材育成

1) 離職防止と職員定着

①離職率

- ・看護職員全体の離職率

全国・大阪府より低い率で経過できている。非正規の離職率が大幅に低下し、正規の離職率が上

昇している。新採用者の離職率は、0%とローテーション研修の成果が実施したアンケート結果より考察できる。

・補助者の離職率

全国、大阪府より大幅に高い。非正規は減少しているが、正規は上昇している。採用後半年以内の離職が4名（看護師正規2名、助手アルバイト1名、助手派遣1名）。離職理由に人間関係、業務内容を挙げるスタッフもあり、協働のあり方について次年度の課題である。

また、派遣（助手）9名枠の高額な人件費については、直接雇用へ移行計画取組中であり、同時に正規、非正規の処遇も見直しが見えたため、雇用促進に向け取組みを強化する。

②採用活動

・合同就職説明会2回/年（6月33名・3月100名）、Web説明会2回実施

・パンフレット・HP更新、LINE随時更新。

・インターンシップ2回（8月10名・3月17名）見学会3月3名

コロナ禍ではあったが、参加者の増加と共に採用試験に繋がるケースが増えている。しかしWeb広報だけでは限界がある。次年度は学校訪問を行い、当院看護部のアピールを強化する。

2. 病院経営参画

1) 効果・効率的な病床管理

・病床稼働率88.55%（ベンチマーク94%）

2) 入退院調整、入院前支援体制の整備

・入退院支援加算2 66万4,000円/年

件数295件 関わり件数660件 算定率44.7%

主任会中心にスクリーニングシートの見直し、病床管理マニュアル作成を行い診療報酬算定に繋がっているが、算定率は50%に満たないため、効率的な介入について、多職種で取組みを強化する必要がある。

3) 診療報酬の加算への取り組み

・院内トリアージ加算に加え4月から救急搬送看護体制加算2算定開始、認知症ケア加算を6月、せん妄ハイリスク加算を7月から算定開始し経営参画に貢献した。

・主任会を中心に認知症ケア、せん妄ハイリスク研修会を実施し、確実な算定に繋がった。

また、ポストコロナ患者を受け入れることで、コロナ医療への貢献を行った。

4) 看護部として病院の広報活動に積極的参加

コロナ禍であり、例年行っている地域向けの活動は自粛となった。

3. 教育

1) クリニカルラダーシステム全稼働

クリニカルラダーIのみ稼働で達成できなかった。

次年度、組織統合と新人事評価制度導入に合わせて、大学病院との一体化を図る必要がある。

2) 部署教育

3) 看護学生実習受け入れ

学生実習（本学看護学部・藍野大学・淀川区医師会）

コロナ禍において他施設実習受け入れ困難のため、大学に準じた実習感染対策のもと、2月の淀川区医師会実習生受け入れ人数を増加（1日6名→半日22名）して対応した。

4. 看護ケアの質向上

1) 受け持ち看護師の役割の理解と発揮

ケースカンファレンスは部署によって格差があり、改善が必要である。

2) 看護業務の現状把握と見直し、改善

エビデンスに基づく看護実践能力が弱く、予見・予測して事故を回避することが難しい。看護実践能力の向上と安全な医療・看護の提供が課題である。

3) 職場風土の改善

人材定着に向けた教育支援や、人を教える及び人間関係構築の職場風土の醸成が不足している。採用後半年以内の離職が4名おり、職場風土の醸成は、継続課題である。

4) 人材活用

施設基準要件を満たす部署間リリーフ体制の構築中。

看護補助員との協働システムの構築不足による協力体制不足がある。日本看護協会「看護師・准看護師及び看護補助者の業務のあり方に関するガイドライン」に基づく協働について、次年度取り組みを行う。

5. 安全対策・感染対策

1) 安全対策

①転倒転落事例 186件/年（前年度204件/年）

うちレベル3b以上5件/年（うち4b以上1件）4b以上は今年度のみのため、重大事例として、院内事例検討も実施した。高齢者、認知症患者も多く、組織的取り組みによる事故防止対策の強化が課題である。

②薬剤関連インシデント 218件/月（前年度280件/月）

医療事象事例の早期対応が遅れる傾向あり。問題を問題と捉える力が弱く、早期解決に至らないケースがあるため、エビデンスに基づく看護実践能力の向上と予見・予測して事故を回避できるようリスク感性を養う必要がある。安全な医療・看護の提供が喫緊の課題である。

2) 褥瘡対策

①褥瘡発生率 1.6%（前年度2.2%）

大学 WOC 認定看護師との連携強化と当院も1名 WOC 認定看護師教育課程を修了したため、役割発揮できるように支援する。

3) 院内感染

① COVID-19

疑い事例及びポストコロナを受け入れたが、院内クラスターの発生は起こしていない。

②疥癬発生4名（2021年1月）

③擦式消毒剤平均使用数16.1回/月↑（前年度12.2回/月）と回数も上昇していることもクラスター予防の一つと考察できる。しかし、部署により格差があり、部署ごとの改善が必要である。

南 2 階病棟（一般急性期外科病棟）

（1）看護体制・スタッフ

1）看護体制	10：1（2交代勤務）
2）看護師（常勤）	20名、（非常勤）1名
准看護師（常勤）	2名
看護補助者（常勤）	5名、（非常勤）3名
看護事務者	1名
合計	32名

（令和3年3月31日現在）

（2）特徴

病床数46床の一般・急性期外科病棟で主な診療科は外科・整形外科・脳神経外科・泌尿器科となっている。主な手術として、消化器外科では、開腹手術・腹腔鏡下手術・ポート造設術等、整形外科は、人工関節置換術、観血的骨接合術をはじめ脊椎手術等を幅広く行っている。その他にも泌尿器科、脳神経外科と多種多様な手術が行われ、それぞれの術式に応じた周手術期看護を行っている。

病床稼働率94%を目標にケアミックス病院の特色を活かした病棟活用を行い、個々の患者さんに合わせた術前術後看護を提供することで、患者さんが安心して治療を受け、早期に社会復帰できるようなケアを提供している。また、高齢で手術を受ける患者さんも多く、入院時から地域医療連携室と情報の共有化、多職種との連携を行うことで、在宅療養や社会復帰を想定した退院指導を行い早期退院に向けた取り組みを行っている。

（3）活動内容と評価

- 1）ケアミックス病院の中の急性期病棟として、手術を受ける患者さんの術前術後の看護ケア、全身管理を行う。また院内の急変患者の受け入れ、呼吸器装着患者の管理などの急性期の対応から在宅酸素を行われている呼吸器患者の呼吸ケアまで幅広く対応した。今後も他部門と連携し看護ケアの質の向上が出来るように努めていく。
- 2）毎朝の申し送りをはじめ、月一回、病棟カンファレンスを行い業務の見直しをスタッフと共に行う。インシデントカンファレンスを実施し振り返ることにより、安全に対する意識を高め、問題の抽出と手順やルールの見直し・改善を行い、患者さんにとって安心・安全な医療を提供するよう計画し実施した。しかしまだ不十分な事もあり、安全な療養環境を提供する為にカンファレンスの内容を充実し、更なる業務の見直しと改善が実践できるよう取り組んで行く。
- 3）ナースステーション内を整理整頓し、より安全で働きやすい環境を整えた。整理された状況の維持と、必要書類の整理や物品の配置や管理についての整備を行っている。
- 4）感染予防については手指消毒の徹底を図り、毎月の手指消毒剤の使用量をグラフ表示し、各々が感染について予防できているかを認識できるよう可視化している。今後もさらに意識向上と水平

感染予防に努めていく。

5) 研修や伝達講習などを通して自己研鑽により、看護の専門性を高め意識向上に努めていく。

(4) 今後の目標

混合外科の為、煩雑になりがちな業務において、職員の安全への意識向上が求められている。インシデントカンファレンスの実施の充実や、学習の機会を増やすことにより患者に安心して入院生活を送って頂けるよう努めていく。また、受け持ち看護師の退院調整の役割についての意識を強化し、スムーズな退院支援ができるよう取り組んでいく。

北2階病棟（一般急性期内科病棟）

（1）看護体制・スタッフ

1）看護体制	10：1（2交代勤務）
2）看護師（常勤）	20名（内夜勤専属看護師2名）、（非常勤）1名
准看護師（常勤）	3名
看護補助者（常勤）	3名、（非常勤）3名
看護事務	1名
合計	31名

（令和3年3月31日現在）

（2）特徴

病床数47床の急性期内科病棟で、施設基準は一般病床10：1となっています。当病棟の内科は消化器内科・循環器内科・糖尿病内科・神経内科の患者さんが主に入院されます。内科ではあるが外科の入院もあり手術を受けられる患者さんもおられます。

病床稼働率は、平均87%、平均在院日数は19.7日、稼働率は月により90%を超えることがあります。

当病棟は、急性期病棟ではありますが、高齢の患者さんが多く、入院時から退院調整を図るため地域医療連携室やコメディカルと連携をとり、患者さんが安心して自宅退院が出来るように働きかけています。介護申請についても説明を行い、早期に支援が出来るように心掛けています。

<病棟目標>

- 1）効果・効率的な病床管理
- 2）受け持ち看護師を中心とした看護ケアの充実
- 3）病院経営への参画

（3）活動内容と評価

- 1）外来患者さんや地域医療連携室を通して転院や紹介入院など患者さんが安心して入院が出来るように情報の共有を行っています。退院や転棟など主治医とも相談しながら患者さんやご家族のご希望に添えられるような支援が出来るように心掛けています。
- 2）申し送りや患者カンファレンス、入退院支援カンファレンスなどを通じて、情報の共有を行い患者さんが安心して入院生活を送ることが出来るように日々検討しています。また、受け持ち看護師を中心にケアカンファレンスを行い、退院支援に必要な説明や指導など在宅において患者さんやご家族が困らないように地域との連携を図りながら寄り添ったケアを提供できるように心掛けています。
- 3）各々が経営に参画する意識を持ち、物品の適正使用と認知症やせん妄など患者さんの状態に応じた算定が出来るように、今後も経営に参画する意識を持ち続けていきたい。

(4) 今後の目標

患者さんやご家族が安心して入院生活が送れる環境と「入院してよかった」と思われる人を大切に
した皆様に愛される病棟づくりを目指して、スタッフ一同、日々、努力いたします。

南 3 階西病棟（地域包括ケア病棟）

（1）看護体制・スタッフ

1）看護体制	13：1（2交代勤務）
2）看護師	20名
看護助手	8名
看護事務	1名
合計	29名

（令和3年3月31日現在）

（2）特徴

地域包括ケア病棟は平成28年10月に開設され、急性期治療を終えた後、在宅への退院を目指す患者さんにご利用いただく病棟である。また、在宅介護中のご家族の休息や旅行などの目的でレスパイト入院数も増え大変喜ばれている。

患者さん、ご家族の意向を尊重し、安心して療養生活を送っていただけるように他職種と協働して入院前の日常生活に近づけるように支援している。

（3）活動内容と評価

【令和2年度病棟目標】

1. 患者さんの退院後の生活に沿った退院支援をする
2. 安心、安全な病棟運営
3. 役割に応じた主体的な院内、院外研修の参加

【活動内容】

1. 他職種と共に退院後の生活を考えたケアカンファレンスを実施する。
2. 入院支援計画書は、多職種の充実した計画立案を1週間以内に完成させる。
3. 受け持ち看護師を中心に退院後の生活に沿った退院指導を行う。
4. コメディカルと協働して退院後の生活を見据えて日常生活の支援をする。
5. 業務改善を行い、効率的かつ時間外勤務を減らす。
6. インシデントカンファレンス実施率100%。
7. 役割に応じた研修に主体的に参加し自己研鑽に努める（コロナ禍のためリモート研修）。
8. 在宅復帰率75%以上、看護必要度14%以上維持、病床稼働率90%以上を目標設定し経営の視点で病床管理をする。

【評価】

診療報酬の改定に伴い地域包括ケア加算2の病棟運営となった。退院後の生活を考え他職種と協働

したカンファレンスを毎日開催しており、患者・家族と同じ目標に向けた関わりを持つことができている。受け持ち看護師としての自覚が持てるようになり、入院時から患者・家族の意思を尊重した退院指導を行っている。退院指導の内容は、胃ろうの管理、糖尿病に関する手技の獲得、ストーマケアである。家族の生活背景に合わせてより負担の少ない方法を決定している。その過程では受け持ち看護師が家族と熱心に情報交換をし、必要な物品の選定やサービスの調整、また、MSW・リハビリセラピストと共通の目標を持つことに重点をおいて支援している。

地域包括ケア病棟ではコスト管理や在宅復帰率の維持が非常に重要であり、他職種と共に新しいことを学び常に経営の視点を持って運営している。病棟開設から全時期において地域包括ケア病棟における基準を満たすことができている。また、常に温かい笑顔と言葉かけで安心して入院生活を送れるよう、次もまたこの病院を選んでいただけるようにホスピタリティにも力を入れている。

大学病院の関連病院となり、院内目標に掲げているSSDに基づいて各スタッフが役割に応じた教育計画を立案し院内・院外研修に参加することで自己研鑽に努めている。

(4) 今後の目標

受け持ち看護師を中心に患者の今後の方針を早期に決定し、チームで計画的に退院指導を進めることで期限内に在宅に退院できるように取り組む。そして患者・家族が安心して在宅に戻れるように効果的な支援を考えていく。また、近年は高齢者の増加、神経疾患患者の増加に伴い転倒転落事故が多く、転倒転落事故防止が課題となっている。入院・転入時から患者のこれまでの生活に視点をあて、危険予測と早期の対策を講じるシステムづくり及び、患者の安全を第一に考えた危機管理能力の向上が必要である。

南 3 階東病棟 (医療療養病棟)

(1) 看護体制・スタッフ

1) 看護体制	20 : 1 (2 交代勤務)
2) 看護師 (常勤)	14名、(非常勤) 1名
准看護師 (常勤)	3名 (内 夜勤専従者 1名)
看護補助者 (常勤)	7名、(非常勤) 2名
看護事務者	1名
合計	28名

(令和 3 年 3 月 31 日現在)

(2) 特徴

医療療養病棟 (療養病棟加算 1) 50 床の病棟である。

令和 2 年 1 月より療養環境改善目的で個室を 2 床増床した。後期高齢者が 90% 前後、脳外科疾患やパーキンソン病、認知症、誤嚥性肺炎などで意識障害を伴う患者さんや拘縮を伴い臥床で過ごす患者さんが大半を占めている。

経腸栄養を必要とする患者さんが 70% を占め、90% 以上が担送患者さんである。個々の患者さんの疾患に応じたリハビリテーションの介入及び看護ケアを実施し安心して療養していただける環境を提供している。

他病院からの転院や急性期病棟からの転棟受入れをスムーズに行い、医師、リハビリ担当者、MSW、近隣の在宅介護関連の方々とも連携を図りながら、転院及び在宅退院支援に取り組んでいる。

(3) 活動内容と評価

- 1) 食事介助、清潔の援助など日常生活の支援を通じて患者さんや家族の思いや不安を傾聴し気持ちに寄り添えるよう努力している。看護ケアの充実を図るためケアカンファレンスを通して日々のケアの統一、看護の質の向上に繋げている。
- 2) 意識障害があり意思を伝えられない患者さんが多く、尊厳を守って関わっている。家族とのコミュニケーションを大切にしながら、医師、リハビリ、MSW と連携を図り、個々の患者さんに適した看護ケアの提供と退院支援を行うよう努めている。
- 3) 急性期病棟からの転棟受入においては、各病棟責任者に患者さんの情報を提供してもらい個々の患者さんに適した療養環境が整えられるよう工夫している。また、転棟後は家族と面談し、今後の方向性を確認して看護に生かしている。
- 4) 終末期の患者さんも多く、患者さん、家族の意志に寄り添い、その人らしいエンドオブライフを過していただけるよう情報共有を充分に行いケアに取り組んでいる。
- 5) 平成 30 年より大阪医科大学本院より口腔外科医師による口腔内診察、ケアを実施し、スタッフと方法を共有することで日々の口腔ケアの強化を図り、誤嚥性肺炎予防に取り組んでいる。

(4) 今後の目標

個々の職員が目標管理に基づいて自己研鑽し、ケアカンファレンスを充実させ、看護の質の向上を目指すことで、患者さんに安心安全で快適な療養環境の提供ができるよう努力する。個室を増床した事で終末期患者さんのケア環境改善を行うとともに ACP について学び、看護ケアに活かす。

他部門、他部署と連携し、スムーズな入退院調整を図り、稼働率100%、医療区分（Ⅱ・Ⅲ）80%以上維持を目標とし安定した病棟運営を行い病院運営に参画する。

北 3 階病棟（回復期リハビリテーション病棟）

（1）看護体制・スタッフ

- 1) 看護体制 15：1（2交代勤務）
- 2) 看護師（常勤） 12名（内夜勤専属看護師3名を含む）
 - 准看護師（常勤） 1名
 - 看護補助者（常勤） 3名、（非常勤） 4名
 - 看護事務者 1名
- 合計 21名

（令和3年3月31日現在）

（2）特徴

病床数32床の回復期リハビリテーション病棟で、整形外科と脳外科を中心に内科、外科など急性期治療が終了した後のリハビリテーションを集中的に行う病棟である。当病棟は、整形外科では骨折や関節障害、脳外科では脳梗塞や高次脳障害、認知症、その他内科では肺炎後の廃用症候群や外科の手術後のリハビリテーションを目的に急性期病棟から転入を受け入れている。2020年の病床稼働率は、平均93%、平均在院日数は47日、在宅復帰率は85%である。急性期病棟と連携をとり、リハビリテーション科及び医療ソーシャルワーカーなど多職種が連携し、患者が住み慣れた地域に帰れるように、また早期に社会復帰できるように入退院支援を行っている。高齢者が多く地域医療連携室と連携し、介護申請など退院に向け早期の取り組みを実施している。

（3）活動内容と評価

＜病棟目標＞

- 1) 病院経営参画
- 2) 他職種連携、協働による積極的な退院支援
- 3) 業務改善及び人材育成による看護ケアの充実

＜評価＞

- 1) 急性期治療が終了した患者さんがスムーズに集中した効果的な機能訓練ができるように転入受け入れを行っている。
- 2) リハビリテーション科との情報交換を行い、排泄行動訓練や病棟での自主訓練の内容などを検討し、ADLの向上に努めている。高齢者が多くADLの向上に伴い、転倒など事故発生の危険性も高まるため患者指導の充実と環境整備に努めている。
- 3) 毎朝の申し送りをはじめ、リハビリテーション及び医療ソーシャルワーカーと共にカンファレンスを毎日行い、進行状況や問題点の抽出、今後の方針などを情報共有し早期退院に繋がるよう取り組んでいる。週1回、回復期対象患者カンファレンスを行い、多職種で情報共有を行うことで効率的なベッドコントロールに繋げている。

(4) 今後の目標

他職種との連携をより深め、統一したケアを実施し計画的な退院調整を行う。患者さんが安心してリハビリテーションを実施し、またスムーズに社会復帰が出来るようにスタッフとともに協力し、より良い病棟づくりを行う。

外 来

(1) 看護体制・スタッフ

- | | |
|---------|--------|
| 1) 看護体制 | 2 交代勤務 |
| 2) 看護師 | 15名 |
| 看護事務者 | 1名 |
| 合計 | 17名 |

(令和3年3月31日現在)

(2) 特徴

外来では一般診療、専門診療、救急診療の3本柱での診療に加え、特殊検査や処置、看護外来と多様な内容に対応している。また地域のニーズに応えるべく夜間・休日の突発的なケガや病気を訴えて来院される患者さんの時間外診療も積極的に受け入れをしている。緊急入院や緊急検査においても、昼夜いかなる状況にも対応できる体制作りを強化している。

【診療科目】

- ・内科（呼吸器・循環器・消化器・膠原病・神経・糖尿病・ペースメーカー）
- ・外科（一般消化器・乳腺）・整形外科・脳神経外科・泌尿器科・眼科
- ・放射線科・リハビリテーション科

【看護活動】

「目配り・気配り・心配り」を合い言葉に患者さんの苦痛や不安に寄り添い、急性期では苦痛の緩和、慢性期では疾患を抱えながら在宅で生活する上でのサポートができるよう心がけている。また、入院支援を行い患者さんの日常生活を把握し病棟へとつなげることで、入院生活への不安軽減に努めている。

(3) 活動内容と評価

- 1) コロナ禍である現状をふまえスタッフ1人1人の感染に対する意識を高め日々刻々と変化する情報にも素早く正確に対応できるように努めている。毎週コロナワーキングでの情報を、申し送りノートを利用しスタッフ間への情報共有を行っている。また、感染委員を中心に正しい手指消毒・PPEの着脱の方法を徹底し感染防止に努めている。
院内クラスターの発生なく医療体制が維持できた。
- 2) 業務改善として救急車で搬送された患者さんが帰宅可能な場合、次の外来予約の取得を徹底しシームレスな医療提供で患者さんの安心感につなげている。

(4) 今後の目標

- 1、安全で確実に診療、検査が実施できるような人員配置、業務整備を行う。
- 2、患者さんのニーズを把握し、それに対応できる知識・技術の向上、人材育成に努める
- 3、外来から病棟、病棟から外来と情報を共有することで患者さんの全体像を把握することに努める。

手術室・中央材料室

(1) スタッフ

看護師	5名
准看護師	1名
中材看護補助者	1名
合計	7名

(令和3年3月31日現在)

(2) 特徴

手術室は整形外科、外科、脳外科、泌尿器科、眼科が共同にて3室を使用しており、令和2年度の手術件数は857件である。また内視鏡を使用した低侵襲手術や、日帰り手術、各臓器の温存手術など多様化するニーズに対応した手術を実施している。中材は手術室看護師と専任スタッフとで運営しており、院内で使用する診療や看護に必要な器具、医療材料を一元管理し、適切な洗浄、滅菌を実施し院内の医療、看護を円滑かつ安全に実施できるように支援している。

(3) 活動内容と評価

- ・「患者さんに安全で安心な手術室看護を提供する」を目標として、ヒヤリハットインシデント報告による情報共有を行い、問題の対策、評価を実施し日々の業務に反映している。
- ・手術室看護師としての役割・責任を自覚できるように、業務分担を通じて各自の役割を明確にしている。看護の分野だけではなく、経営参画としてコスト意識が持てるように医療材料、薬剤の管理業務を担うことで、スタッフ主体による物品管理の適正化を実現している。
- ・洗浄・滅菌業務については、大阪医科大学附属病院と連携し、リリース体制の構築や有資格者からの指導を受けることで質の向上を図っている。

(4) 今後の目標

手術の多様化に対応するために、手術室看護師として、迅速・的確に状況判断できる知識や技術に加え接遇などの態度面も高められるような研鑽の環境を整える。

また、医師や臨床工学技士などの多職種者との連携を充実させるために意見交換ができる人間関係の構築を積極的に行っていく。

血液浄化センター

(1) スタッフ

1) センター長 小林 大介
透析担当医師 木下 将宏、西村 一希

2) 看護師（常勤）6名、（非常勤）2名
看護事務者 1名
合計 9名

（令和3年3月31日現在）

(2) 特徴

- ・血液浄化センターは、血液透析、血液透析濾過（オフライン HDF）、持続緩徐式血液濾過療法、顆粒球吸着療法など常勤医師2名、その他の医師3名で血液透析の診療を行っている。
- ・血液透析では入院や外来患者さんの血液透析の透析中の状態観察や血液データの管理、食事指導や患者さんの日常生活の自己管理の援助を行っている。また、シャント PTA などのブラットアクセスのインターベーション治療やバスキュラーアクセス管理も行っている。

(3) 診療実績

手術名称	2018年度	2019年度	2020年度
経皮的シャント拡張術	136件	170件	181件

	2018年度	2019年度	2020年度
血液透析	8,283回	7,402回	6,824回

(4) 今後の目標

- ・透析の専門職としての知識を高め、患者さんが円滑に透析生活を送れるよう、質の高い看護を提供する。
- ・地域医療に根ざした病院となるよう地域との連携を深め、今後も努力していきたい。